

福本和夫論

—比較文化学の先駆者、福本和夫—

藤田昌志

福本和夫論

—比較文化学の先駆者、福本和夫—

FUJITA Masashi

【摘要】

福本和夫（1894-1983 享年 89 歳）は比較文化学の先駆者。他一時在日本共産党員と積極分子之間具有圧倒性的影響力、可是由于 1927 年共产国际的‘27 年纲领’被批判而喪失地位。1928 年 6 月因 3・15 案件的連坐而被逮捕、一直到 1942 年在獄中過了十四年。他在獄中獲得启发、开始构思“日本文藝復興”研究、后于 1967 年經東西書房出版《日本文藝復興事論》。《日本文藝復興史論》（1967）是就有关日本、中国（明、清）、西洋的“學藝復興”进行综合、比較的研究、是比較文化学的著作。福本和夫可謂是比較文化学的先驅者之一。

キーワード：人間性の回復 日本ルネッサンス 学芸復興 総合・比較研究

1 はじめに

福本和夫（1894 年－1983 年、89 歳没。）は比較文化学の先駆者である。山川均を批判し、理論闘争による前衛党の樹立を提唱（＝福本イズム）し、一時、共産党員や活動家の間で圧倒的な影響力を持ったが 1927 年のコミンテルンの「27 年テーゼ」で批判され失脚した。1928 年（昭和 3）6 月、三・一五事件に連座して検挙され、1942 年（昭和 17）まで 14 年間、獄中生活を送り、その間に「日本ルネッサンス」研究の着想を得た。獄中期間から浮世絵のフランス印象派への影響についての研究のパイオニアとなり、1955 年（昭和 30）『北斎と印象派・立体派の人々』昭森社を出版し、近世の捕鯨技術の研究も行い、1967 年（昭和 42）『日本ルネッサンス史論』東西書房を出版した⁽¹⁾。1967 年（昭和 42）『日本ルネッ

サンス史論』はルネッサンス（福本は文芸復興ではなく、広く「学芸復興」という）の日本・中国（明・清）・西洋の総合・比較研究であり、比較文化学の本である。福本和夫は日本の比較文化学の先駆者のひとりである。

2 福本和夫について

福本和夫は1894年7月4日、鳥取県久米郡下北条町（現・東伯郡北栄町）に福本信蔵の三男として生まれ、旧制倉吉中学校、旧制第一高等学校を経て、1920年（大正9）東京帝国大学法学部を卒業している。大学卒業後、松江高等学校（現・島根大学）教授に就任し、1922年（大正11）文部省在外研究員として英独仏に2年半留学した福本は、ドイツのワイマールにあるフランクフルト大学社会研究所でコルシュやルカーチからマルクス主義を学び、更に文化史という研究方法を学んで日本におけるその研究の創始者とされている⁽²⁾。ここまでの福本とその時代状況について、以下、より詳しく考察し記述してみたいと思う。

1917年（大正6）3月、第一高等学校を卒業して9月、東京帝国大学法学部政治学科に入学した福本は東大在学中に、吉野作造や新渡戸稲造から授業を受けている。当時はロシア革命（1917年）米騒動（1918年）原敬内閣の出現（1918年）と大正デモクラシーの満開期であった⁽³⁾。

大正期は明治期の連続的進化の意識とは異なり、大正前期、社会の進化発展への根底的疑いや反発が「白樺」派や西田哲学の誕生と哲学青年といった先駆的存在の後、深化され、大正末には質的に新しい社会運動と結びつき始める時期であった⁽⁴⁾。大正期の世界化は海外、欧米の「権威」への屈伏と表裏の関係を思想上、有していて、ロシア革命後の昭和期のソヴィエト・マルクス主義の導入は「権威」の無批判的導入、没主体的屈服が顕著になってきたことの典型的な事象であった⁽⁵⁾。

東京帝大時代、福本は吉野作造から政治史や支那革命史などを学んでいるが、福本の後年の述懐によると、福本は吉野からことさら何かを学んだわけではなく、新聞記事などを素材にして行われる吉野の授業に反発してか、福本はあまり受講熱心な学生ではなかったようである⁽⁶⁾。

1922年（大正11）から2年半の英独仏への留学時代、ドイツのワイマールにあるフランクフルト大学社会研究所でハンガリーの哲学者ルカーチ・ジョルジやドイツの思想家カール・コルシュの指導の下にマルクス主義を学んだことには大きな意義があった。ルカーチやコルシュはマルクス主義の理論を根源的に問い直すことにより主体的人間の復権を目指した、マルクスの論理の新たな地平を開くマルクス主義ルネッサンスを創出していった人々であった⁽⁷⁾。

コルシュ『マルクス主義と哲学』とルカーチ『歴史と階級意識』は1923年に刊行された時から“極左”“修正主義”として“正統派”マルクス主義・コミンテルンによる批判にさらされていて、人間の「社会的存在が彼らの意識を規定する」というマルクス『経済学批判』の序文の一文をコミンテルン・正統派が機械的に意識と存在を対置し、人間主体を経済構造が一義的に規定すると解する考えに立つのに対して、コルシュとルカーチは歴史における人間の意識が存在と結びつき、いかなる役割を担い、どのような意義を持ち変革へ向けての主体の形成を果たすのかを問題とし、意識そのもののありようを強調した⁽⁸⁾。福井眞佐汎(2005)は「福本イズム」批判について次のように述べている。「第二次共産党の中心理論になった「福本イズム」の批判はようやく1927年になって始まる。だがそれは「福本イズム」がコミンテルンから排斥されたコルシュ、ルカーチの“修正主義”的な理論に依っているという批判であり、「福本イズム」に内在してその理論を検討したものではなかった⁽⁹⁾。

1924年9月に留学から帰国した福本和夫は同年12月号の雑誌『マルクス主義』に「経済学批判のうちにおけるマルクス『資本論』の範囲を論ず」を投稿し、その論文は『資本論』の構造を『剰余価値説』（ドイツ語でしか読めない）をみとおして書いたもので、河上肇や高畑素之（『資本論』の訳者）といった日本のそれのまでのマルクス主義学者を総なめに批判したものであった⁽¹⁰⁾。

松田道雄(2005)は福本和夫という人物の魅力は「その新鮮さ」にあったと言い、「福本和夫ほど学生にだけ呼びかけた社会主義者はそれまでになかった⁽¹¹⁾」と述べ、更に「福本和夫が青年のインテリゲンチアをひきつけたのは「敵」の存在をはっきり示したことにあり⁽¹²⁾」り、「福本和夫が私たち学生をとらえたのは、明治支配こそ、われわれの敵であり、これを打ちたおさないかぎり、解放はありえないことをはっきりいったことだ。そして、彼はこの敵に絶対専制勢力という名をつけた⁽¹³⁾」と指摘している。

福本和夫の強みは原典でマルクス、レーニンを読んでいたこと（＝権威）であったが、その「権威」は既述の大正期の欧米の「権威」の表れでもあった。皮肉なことに福本の「権威」はより強いコミンテルンの「脅威」と「権威」によって1927年「日本にかんするテーゼ」として否定されるのである。

1928年6月から1942年4月まで14年間にわたる獄中生活を送った福本和夫は敗戦後、日本ルネッサンス史論の一環として、葛飾北斎の研究成果を出版し、1950年（昭和25）共産党に復党、6月の参議院選挙で鳥取地方区から立候補するが落選し、9月のサンフランシスコ会議で同月4日に、総司令部の命令で逮捕され、23日拘留の後、吉田政府の命令で公職追放となり、55年の六全協まで徳田主流派に対する反対運動を日本共産党統一協議会を

率いて続ける。スターリン批判の後、農業問題に関心を持ち、スターリン主義と徳田主義と「野坂——宮本路線」に対する独自の批判を継続し、日本ルネッサンス史論の大著を完成した⁽¹⁴⁾。

福本和夫が日本ルネッサンスの問題の解明に異常な熱意とエネルギーを傾けた、その一番の出発点は「明治維新政権の性格規定の究明——氏は明治維新はブルジョア革命であるが、できた明治政権は絶対主義君主制とみる——にあるという」⁽¹⁵⁾。そのためには、遡って徳川封建時代をみなければならず、“労農派”“封建派”に異論があった福本は、その誤りを克服するための繞廻・包囲作戦としてルネッサンスの研究が必要だと考えたのが直接の契機であった⁽¹⁶⁾。「福本の目指しているのは人間性の回復、ヒューマンイズムの問題なのである」⁽¹⁷⁾と飯田（2005）は述べている。

3 『日本ルネッサンス史論』について

この章では福本和夫（1967年（昭和42））『日本ルネッサンス史論』東西書房について考察してみたい。当該書の比較文化学の視点を意識的に考察してみたいと思う。

福本の『日本ルネッサンス史論』の特徴は大要、次のようにまとめられる⁽¹⁸⁾。まず、既述のように「ルネッサンス」の訳語を福本は文芸復興ではなく、「学芸復興」としてることからもわかるように、福本の「ルネッサンス」論は「学芸・芸術の分野ばかりでなく政治思想や哲学、経済論や自然科学、技術などにも見られる人間認識の復興」である点で「総合的」な比較文化学である。階級的視点から見ると、ルネッサンスは「町人（市民）階級による文化革命であり、その技術と経済基礎はマニユファクチャーの発達にある」。福本はルネッサンスを中世的普遍性によって抑圧されてきた自我や個性の「市民固有の文化への回帰すなわち復古」ととらえ、その波及過程は不均等な発展をとげるとする。福本は日本ルネッサンス現象を「航海貿易、鉱山業、鉱山学、儒学、国学、歌道、医学、兵学、法学、史学、和算、カラクリ技術、化学（錬金術など）、博物学、地学、絵画、印刷術、文学（小説、俳諧、戯曲、詩）、書、辞典、政治学、ユートピア思想、その他多方面」にわたって論証し、西洋ルネッサンスの時期が十五、六世紀（イタリア、フランス、イギリスなど国によって時期に違いがある）であったのに対して、日本ルネッサンスは「復古儒学者による儒教改革の第一声が出てきた寛文初年（1661年）に始まり、著名な学芸復興家が相ついで死去した嘉永三年（1850年。それから三年後にペルリの来航が起こった）に終わったことを明らかにし」、「時期の確定」を行ったのである。福本は「雑学」とその「総合化」を、研究を志す後輩の多くに奨めたという。

以下、『日本ルネッサンス史論』の各章の中から重要点をピックアップして考察してみた

いと思う。

第一章 序説 ではアジアで唯一、日本が植民地化しなかった理由を「その要因の一つは、アジアでひとり日本の近世史にはルネッサンス時代が存在し、したがってまた、マニュファクチュアの成立・発展が見られたという事実のうちに、求められるべきであろう。」とし「日本ルネッサンス史、日本マニュファクチュア史の総合・比較研究の大成が日本の近世史を論ずる上にもっとも重要にして不可欠の研究課題であることに世の注意を喚起したい」⁽¹⁹⁾ と、唯物論者らしくマニュファクチュアという下部構造の上にルネッサンスという文化＝上部構造が日本に存在していて両者が表裏一体であることを述べ、自らの研究姿勢が「総合・比較研究」であると比較文化学的研究姿勢を明確にしている。

第二章 日本ルネッサンスの時代性・階級性・革新性 では、従来の歴史家が家康が元和偃武とともに大いに学問を奨励したので、やがて元禄時代文学の興隆を見るに至った、それが「日本の文芸復興だ」と考えているのに対して、「徳川幕府の武士的な文教政策に対する反抗運動、それが学芸復興の根幹であり、学芸復興のおこらざるをえなかったゆえんである」⁽²⁰⁾ と述べ、日本近世のルネッサンスが「反抗運動の総合にほかならない」とし、林羅山らの朱子学への批判・反抗の第一矢を放ったのが、山鹿素行を先達とする復古儒学であり、それに次いで国学の運動がおこり、書道面でも書道復古家が起こり、狩野派に対して浮世絵版画が創始され、御用医学の御世方に対して、古医方の復古運動が展開された⁽²¹⁾ と具体的に説明している。

第五章 日本近世文芸復興期論前史 日本ルネッサンス史論の方法論 ではその方法論を①中世から近世への過度期における＝近世への黎明における史的範疇として日本ルネッサンスという語を用いていること②多種多様の要素を見出した総合・比較研究であること③始期と終期を決定すること④中国明代並びに清代文化との比較研究であること⑤西洋ルネッサンスとの比較研究であること⁽²²⁾ ——と規定している。また、ルネッサンスは東西でその発生の時期がおよそ 360 年のズレがあつて、同時期ではなかったことにも言及し、単に同時代の東西を機械的に比較することにより、日本のルネッサンスを論じた高井月郊 (1929) 『日本文芸復興史』上下二巻が日本の文芸復興期を室町時代に始まり安土桃山時代を中期として、徳川の元禄時代に終わるとすることを「根本的にあやまった比較論にすぎない」と批判している⁽²³⁾。

第六章 ルネッサンス期に先行した航海貿易の発達 では唐の太宗の政治・文教施設のスクールとその理念—徳川家康との関係と対比を中心に—で唐の太宗と徳川家康の政策について総合・比較研究を行っている。

唐の政治は周囲の民族に対して、「単なる羈縻^{きび}すなわち、継続的なもので、完全なる領土

というわけではなく、諸民族はそれぞれに独立と自治を失わないで、維持しながら、時々唐に朝貢し、貢物を差し出した。都護府が多少の兵力をもって、それらを控制し、動揺したり侵寇したりしないように、おさえていただけであった⁽²⁴⁾とし、唐の宗教政策も「西方の諸外国から新たに伝来したゾロアスター教、景教、回教等の宗教を、おおらかに受入れて、国内にその布教を許した寛容の態度であり、信教自由の政策である⁽²⁵⁾」とゆるやかなものであったと述べている。

それに対して、徳川家康の「キリシタン弾圧——禁止の政策は太宗の宗教政策とははなはだしく対蹠的であり、鎖国政策もまた、唐の羈縻政策とすこぶる対蹠的で」、「その意味において、むしろ最も肝腎な点で太宗にあやかりそこねた家康であったことは否定しがた」く、「家康の二大失策がここにあった⁽²⁶⁾」と厳しく家康を批判している。既述のように日本ルネッサンスは「徳川幕府の武士的な文教政策に対する反抗運動、それが学芸復興の根幹である」と福本（1967年（昭和42））は述べている。家康の施策を否定的にとらえるのは当然のことであろう。

第七章 日本ルネッサンスと鉱山業・鉱山学・貨幣流通 ではルネッサンスを発生させたのは町人の抬頭であり、町人の抬頭は商業資本、高利貸資本、生産資本の発展によるものであり、それら資本の発展は貨幣経済の普及をその前提条件の一つとしており、貨幣経済の普及には鉱山業・鉱山学の発展が必要であることが述べられ、それは西洋においても、日本においてもルネッサンス期に先行しかつ併行してみられるとし、「戦国時代は、ある意味では鉱山争奪戦の時代といってもいいほど」であり、「佐渡の金山、播州生野の銀山、石州大森の銀山などが争奪の対象であった⁽²⁷⁾」ことが述べられている。

第九章 朱子学にたいする復古儒学その他の抗争とその反動 では幕府の官学——朱子学に対して、不満・抗議の第一矢を放ったのは山鹿素行であり（寛文元年（1661））、第二矢を放ったのは京都の町人出身の儒者、伊藤仁斎であること等が述べられている。山鹿素行の学風の特徴は「その古道学業並びに武士道学において、もっとも顕著」であり、それは国学者の平田篤胤や経済学者の佐藤信淵に影響を与え、幕末の志士吉田松陰によってうけつがれたが、「篤胤に至ってその極に達した国学の弊も、松陰の孟子歪曲による絶対主義イデオロギーの端緒的形成も、その淵源は主として素行の偏狭で、多分にハタハリ性に富んだ学風に由来するといつて差支えあるまい⁽²⁸⁾」と福本は述べている。松陰については第四十九章で再度、論評している。

第二二章 日本に錬金術がおこなわれなかったことの意味するもの では中国、西洋を視野に入れた論が展開されている。総合的な、比較文化学的な論述である。

中国の煉丹術は後漢から晋代、唐代にかけてが最盛時で、煉丹術と仙薬に最も重きを置

く外丹派の葛洪が煉丹法の集成である『抱朴子』内篇二十巻を著したのは、西暦317、8年であるから3、4世紀の時代であったとしてよいが、宋代以後は外丹派に変わって内丹派が世に迎えられ、優勢になった⁽²⁹⁾。宋代は生理的・心理的に神仙を求める傾向が強く、仏教で禅宗が栄え、儒教で朱子学が起こったことも内丹派に有利であり、宋代の大文豪、蘇東坡や陸放翁らが内丹派の傾倒者であったこともあずかって大いに力があり、内丹派が栄えたのであった⁽³⁰⁾。

東洋の煉丹術にあたるものが西洋では、アル・ケミイ（錬金術）と呼ばれ、古代から中世にかけて、ルネッサンス時代の初期に至るまで行われていたが、西洋の錬金術は①身体を病魔から守り不老長寿を守ること②卑金属を金属に転換する方法を有する試薬、または「賢者の石」を求め、これにより無限の富を作り出すこと——という二つの目的を持っていた⁽³¹⁾。

西洋の錬金術には東洋の煉丹術に見られない特色がいくつかあり、それは①西洋錬金術は中世で終わることなくルネッサンス期まで続けられていること②ライプニッツやニュートンという大学者が共に錬金術に深い関心を寄せ一時期これに熱中していること③1890年代になっても西洋には錬金術を試みる者があられていること④西洋の錬金術と近代科学の間には自主的な発展の連続関係が存在すること——である⁽³²⁾と福本は言う。

比較文化学的にみれば、中国煉丹術の主な目的が不老長寿を享受することにあつたのに対して、西洋錬金術は無限の富を得ることを主目的にしていた⁽³³⁾。

日本で煉丹術が行われなかった理由について福本は①日本では仏教が普及し、それが不老長生の思想の発生・発達を妨げたこと②鎌倉時代に導入された禅宗、宋学は内丹派と共通するもので、外丹派＝煉丹術と仙薬を最も重視した『抱朴子』とは相容れないものであったこと③徳川幕府の採用した朱子学の朱子は内丹派の共鳴者、支持者であったこと④徳川時代に広くもてはやされた宋の蘇東坡も内丹派であったこと⑤日本では弁証法的思惟や歴史哲学が強くなかったこと⑥日本では各地で多くの金、銀の算出が続き、卑金属を金銀に転換する作業に熱中しなければならぬ必要がなかったこと等——を挙げている⁽³⁴⁾。

第二六章 日本ルネッサンスの印刷術と中国・朝鮮・西洋の比較 では浮世絵の錦絵版画について次のように述べている。「その多色刷の絢爛・豪華さにおいて、中国版画よりも西洋版画よりもはるかにすぐれ、独自の境地を開いた。（中略）後年、フランス印象派の絵画・音楽・彫刻のおこるのに、直接に大きな示唆と影響・感化を与えたのが、中国の版画でもデューラー等のドイツ版画でもなく、わが浮世絵の錦絵版画であったのは偶然ではない。／前掲の精巧さをきわめた木版画の素晴らしい技術こそは、いうならば、絵画における我が錦絵版画に対応するもの、あるいは、これとうらおもてのごとき関係にあるものと

いってよかろうか」⁽³⁵⁾。

中国で漢文の書物が洋式な鉛活字で本格的に印刷できるようになったのは、1859年以降であろうが、小規模に少しずつではあるが1620年代ないし1790年代から行われていたことは否定できないとし、注意すべき点は①中央で清朝宮廷にとりいていたマテオリッチらイタリア人宣教師が行っていたのではなく、地方各地に活躍舞台を求めていたイギリス人やアメリカ人が行っていたこと②キリシタン厳禁の鎖国日本と違って、中国には欧米人が印刷機とバイブルをもってはいり込む余地があったこと③日本の方が近代的な鉛活字による印刷が本格的に行われるようになったのは中国より2、30年おくれているが、日本では自主的に自ら主体となって印刷を発展させたのに対して、中国では少なくとも清代まではイギリス人、アメリカ人が主体となって発展させたのであって、中国人自身が自主的に発展させたのではなかったこと——であるとし、この第③点の相違は何に由来するのかという、「日本には徳川時代にルネッサンスがあったが、中国では明代、清代にもルネッサンス時代が存在しなかったためである」⁽³⁶⁾と述べている。

第四七章 中国の明代・清代にルネッサンスがなかったことの傍証 では①漢画に職人尽絵なるジャンルがなく、また日本の浮世絵師にあたる一系列の画家の輩出が中国に見られないこと②イギリス・ルネッサンスの世界的巨匠とうたわれているセクスピアー（＝シェイクスピア）とともに東西ルネッサンス文学の双璧とっていい日本の西鶴に当たるものが明代清代には見られないこと⁽³⁷⁾——の二つは中国明代、清代にルネッサンスがなかったことの傍証となるとしている。内藤湖南は宋代を中国近世（近代）として、宋代は「平民発展の時代」と「政治の重要性減衰」の時代であるとし、前者の例として「文人画」の出現、工芸の平民相手への大量生産の開始などを挙げている⁽³⁸⁾。明代、清代だけでなく宋代も視野に入れないのでは、日本と中国のルネッサンスの比較は成立しないのではないだろうか。

第四八章 ルネッサンス期に次いで日本にも啓蒙期があった では1850年で日本ルネッサンス期が終わった後、1857年（安政4）蕃書取調所が幕府によって開設されてから英米流、仏流の立憲思想並びに国会開設運動の勃興・普及を見るに至った時期までを啓蒙期として取り上げている。その記述において特徴的なのは小節「福沢諭吉の啓蒙思潮とその不備・欠陥」で「福沢には復古儒学や復古医学に対する、したがって日本ルネッサンスに対する理解がまったく欠けていたという厳然たる事実の存在することである」⁽³⁹⁾と福沢の不備、欠陥を明瞭に述べ、続けて福沢の『文明論の概略』第五巻が「日本文明の由来」を論じ、日本の「権力の偏重」「偏重の禍」を強調していることには首肯しつつも、儒学については「復古儒学も朱子学同様にみて、何ら区別していない」⁽⁴⁰⁾とし、福沢の西洋文明、

西洋実学の輸入と啓蒙（＝西洋ルネッサンス文化の輸入と啓蒙）が日本ルネッサンス文化の理解なしで行われたことが、偏重の禍の弊を免れ得なかった理由となった、それは日本の啓蒙化の諸家に共通する現象であった⁽⁴¹⁾と日本ルネッサンス文化を理解しないことによる西洋ルネッサンス文化一辺倒の偏重の弊を指摘している。

福本の福沢評価は次の文章に端的に表現されている。「蘭方一辺倒であった福沢は、やがて英米医学一辺倒にかわり、明治六年には、慶應義塾内に英米流医学所を新設したが、明治政府の石黒忠恵らによるドイツ流医学一辺倒のため圧迫されてうまくゆかず、明治十三年ついに廃校のやむなきに至った。ドイツ流医学と、いうならば、共同戦線をはって、漢方医学の息の根をとめたかれの英米流医学がこんどは、ドイツ流医学に締め出しを食ったというわけだから、皮肉なものである」⁽⁴²⁾。

第四九章 わがルネッサンスが国内へあたえた影響 では日本ルネッサンスが各種生産部門にマニファクチュアの発生をもたらし、その発展を促進したことを最も大きな影響とし（福本は下部構造と上部構造の相互影響を考えていたようである。）、小節「素行学派吉田松陰の「講孟余話」による絶対主義理念形成の端緒」では松陰の松下村塾における『講孟余話』を「儒教の歪曲をあえてすることによって、絶対主義理念の芽生を育成培養したもの」⁽⁴³⁾と批判している。

君臣の関係を売買関係とせず、忠孝一致論、忠孝不二論を力説した松陰の『講孟余話』（ex.「暴君頑父につかえて忠孝なるものに至っては、不孝の至り、まことにかなしむべし。しかれども、これにあらざれば、真の忠孝の誠意をみるに足らず。」）が明治23年の教育勅語で「よく忠に、億兆心を一にして、世のその美となせるは、これわが国体の精華にして」となったとし、それは儒教本来の姿ではないと述べて、仁斎・徂徠らの復古儒学者はもちろんのこと、陽明学者の大塩平八郎も「道の要はただ孝にあるのみ。故に我が学は孝の一字をもって、四書六経の理義を貫く」と大いに孝を強調しているが、忠孝一致論、忠孝不二論ではないと松陰を批判している⁽⁴⁴⁾。次の言辞は福本による松陰への歴史的断罪の言辞である。「もし『講孟余話』が儒教の歪曲によって、君臣父子の関係同一視の理念を展開して、維新後の絶対主義天皇制のイデオロギーを胚胎し培養することがなかったとしたら、日本の歴史は、おそらくこんどの悲惨な一大敗戦を経験しないですみ、あるいは、別の道を辿ったであろう。ある意味では、そうもいえるであろうと思われる」⁽⁴⁵⁾。

4 福本のその他の著作について

既述のように福本和夫には（1967）『日本ルネッサンス史論』のほか（1955）『北斎と印象派・立体派の人々』があり、また捕鯨技術やフクロウについての研究もある。「雑学」

とその「総合化」を研究を志す後輩に奨めた福本和夫は紛れもなく比較文化学の先駆者の一人である。

以下では、福本（1972）『日本ルネッサンス史論からみた幸田露伴』法政大学出版局について若干、述べてみたい。福本は（1972）『日本ルネッサンス史論からみた幸田露伴』の序文で、明治・大正の文豪中、特に露伴を取り上げた理由について次の七つを挙げている。

①福本の言う日本ルネッサンス期の代表的作家であった西鶴と馬琴とを両足にしっかりと踏まえて、そこから出発していること。②露伴の都市計画論という先駆的な偉業を顕彰するため。③露伴の史伝物（「太公望」「王羲之」等）と鷗外の史伝物の比較。④露伴の文芸復興説と福本の日本ルネッサンス史論を比較検討すること。⑤権威・体制に対する態度。⑥学問追及の仕方と見識が非常にすぐれていたこと。⑦露伴の終焉が作家・文学者として、一世の碩学として、まことに立派であったこと⁽⁴⁶⁾。

④については第二十九章、三〇章、三一章で具体的に述べられていて、⑥については第三十五章で例を挙げている。

④の比較検討については、第二十九章 露伴の文芸復興論と私の日本ルネッサンス史論では、露伴の文芸復興は元禄時代を中心とするもので、福本の日本ルネッサンス史論は縦に考察を広げ（寛文初年から嘉永三年ごろまで）、横に観点を文芸のみならず、経済、政治、社会とあらゆる分野にわたって総合的に展望したものであること⁽⁴⁷⁾を述べている。⑥の学問追及の仕方と見識のすぐれていたことについては、第三十五章 露伴の仙道・丹道研究の特色とその意味するもの で露伴には仙人についての一連の研究があるが、（1922）「仙人呂洞賓」を書くことを露伴に思い立たせたのは、邯鄲黄梁一炊の夢の話が謡曲や太平記にあるが、謡曲には夢を見た盧生の名しかなく太平記には夢を見せた呂洞賓の名しかない由来を訪ね、唐の李泌の著した「枕中記」一卷が、この物語を記した最初の文献であることを露伴が見出したことを述べ⁽⁴⁸⁾ 露伴が「いつも稀覯の原点を涉猟し、これを立論のよりどころとしていることに、つよい共感をおぼえるとともに驚嘆の念を新たにせずにはいない」⁽⁴⁹⁾と福本は露伴に敬意を表している。

第三十五章の末尾で、福本は露伴への比較文化学的な哀惜の念を吐露している。「このような炯眼と、博搜あくところを知らぬ碩学にこそ、魏伯陽の内丹の書、參同契のみでなく、さらに進んで、葛洪の外丹の書、抱朴子をも取り上げて、東洋錬金術の研究にも先鞭をつけて、その全貌を明らかにすると共に、西洋錬金術との比較検討にまで及んでいただきたいものである。先生ならば、それができたはずである。惜しみても余りあることであつたとおもわずにはいられない」⁽⁵⁰⁾。

5 結語

以上、考察したように福本和夫の研究は古今東西の書の博覧強記によって成立していて、既述のように明治政権を絶対主義君主制と見て、その解明のために前代の徳川封建時代を考察し、日本ルネッサンスの問題の探求に情熱を注いだのであった。明治の福沢諭吉批判（日本ルネッサンスに無知な福沢諭吉）や明治維新前夜の吉田松陰の孟子歪曲の淵源を山鹿素行に見出した福本の知性は鋭く強靱で、明治の絶対主義イデオロギーを強く批判した。福本のルネッサンス研究の根底には「人間性の回復、ヒューマニズムの問題」（飯田（2005）既述）が横たわっており、福本が日本近世のルネッサンスを「徳川幕府の武士的な文教政策に対する反抗運動の総合」ととらえていたところにその問題意識、比較文化学的研究姿勢は明瞭にみとれる。福本和夫はまちがいになく比較文化学研究の先駆者の一人である。

〔注〕

- (1) 以上の記述は Wikipedia 2018.8.7 に負うところが大きい。
- (2) Wikipedia 2018.7 閲覧による
- (3) 小山弘健（2005）「福本和夫—前衛結晶の論理」小島亮編（2005）所収 p.20
- (4) 清水多吉（2005）「飛翔と不安—福本と三木をめぐって—」小島亮編（2005）所収 pp.201—203
- (5) 清水多吉（2005）「飛翔と不安—福本と三木をめぐって—」小島亮編（2005）所収 p.201
- (6) 清水多吉（2005）「飛翔と不安—福本と三木をめぐって—」小島亮編（2005）所収 p.207
- (7) 福井眞佐汎（2005）「福本和夫と一九二〇年代」小島亮編（2005）所収 p.423
- (8) 福井眞佐汎（2005）小島亮編（2005）所収 p.430
- (9) 福井眞佐汎（2005）小島亮編（2005）所収 p.430
- (10) 松田道雄（2005）「昭和思想史 I 解説〔抄録〕」小島亮編（2005）所収 pp.59—60
- (11) 松田道雄（2005）小島亮編（2005）所収 p.59
- (12) 松田道雄（2005）小島亮編（2005）所収 p.62
- (13) 松田道雄（2005）小島亮編（2005）所収 p.67
- (14) 小山弘健（2005）「福本和夫—前衛結晶の論理」小島亮編（2005）所収 pp.31—32
- (15) 飯田裕子（2005）小島亮編（2005）所収 p.402
- (16) 飯田裕子（2005）小島亮編（2005）所収 p.402
- (17) 飯田裕子（2005）小島亮編（2005）所収 p.403
- (18) 石見尚（2005）「福本和夫と日本ルネッサンス史論」小島亮編（2005）所収 pp.408—410
に負うところが大きい。「 」は石見尚（2005）の引用である。

- (19) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) 『日本ルネッサンス史論』 東西書房 p.10
- (20) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.48
- (21) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.48
- (22) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.98-103
- (23) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.102-103
- (24) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.146-147
- (25) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.147
- (26) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.150
- (27) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.151
- (28) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.167
- (29) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.344
- (30) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.344-345
- (31) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.345
- (32) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.345-347
- (33) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.352
- (34) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.361-363
- (35) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.432
- (36) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.448-449
- (37) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.737-738, p743
- (38) 藤田昌志 (2011) 「内藤湖南の日本論・中国論」 藤田昌志 (2011) 所収 pp.220-221
- (39) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.750
- (40) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.750
- (41) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.750-751
- (42) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.752
- (43) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) p.768
- (44) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.767-768
- (45) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) pp.770-771
- (46) 福本 (1972) 序 iv-x
- (47) 福本 (1972) p.398
- (48) 福本 (1972) pp.451-452
- (49) 福本 (1972) 序 iv
- (50) 福本 (1972) p.460

【引用文献・参考文献】

- (1) 小山弘健 (2005) 「福本和夫—前衛結晶の論理」 小島亮編 (2005) 所収
- (2) 小島亮編 (2005) 『福本和夫の思想—研究論大集成』 こぶし書房
- (3) 清水多吉 (2005) 「飛翔と不安—福本と三木をめぐって—」 小島亮編 (2005) 所収
- (4) 福井眞佐汎 (2005) 「福本和夫と一九二〇年代」 小島亮編 (2005) 所収
- (5) 松田道雄 (2005) 「昭和思想史 I 解説〔抄録〕」 小島亮編 (2005) 所収
- (6) 飯田裕子 (2005) 小島亮編 (2005) 所収
- (7) 石見尚 (2005) 「福本和夫と日本ルネッサンス史論」 小島亮編 (2005) 所収
- (8) 福本和夫 (1967年 (昭和42)) 『日本ルネッサンス史論』 東西書房
- (9) 藤田昌志 (2011) 「内藤湖南の日本論・中国論」 藤田昌志 (2011) 所収
- (10) 藤田昌志 (2011) 『明治・大正の日中文化論』 三重大学出版会
- (11) 福本和夫 (1972) 『日本ルネッサンス史論からみた幸田露伴』 法政大学出版局